

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 岡崎正継著 『中古中世語論攷』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小柳, 智一, Koyanagi, Tomokazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000358

〔紹介〕

岡崎正継著 『中古中世語論攷』

小柳智一

本書は、國學院大學名誉教授の岡崎正継先生の論文集である。

前著『国語助詞論攷』（平成八年、おうふう）所収のものと合わせて、先生の論文はこれではほすべてが容易に読めるようになった。先生は私の恩師で、師の著書を紹介するのは恐れ多いが、光栄な機会に恵まれたことに甘え、いささか個人的なことを交えるのをお許し頂きたい。まず本書の目次を掲げる。

語法篇

第一章 推定伝聞の助動詞「なり」について―その承接と

意味―

第二章 今昔物語集の「今夜」と「夜前」と

第三章 源氏物語の「給ふる」「侍り」について

第四章 「申す」「聞えさす」「聞ゆ」―官位・身分・人名

を承ける場合について―

第五章 中世の敬語―受益敬語について―

第六章 「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐる

語彙篇

第七章 源氏物語用語の清濁について

I 首書源氏物語の「ときとき」と「ときどき」

II 「調す」清音のこと

III 「螺鈿」は「ラテン」であった

第八章 「けそん」は「家損」なりや—源氏物語用語考—

第九章 「ウソ」の語源

第十章 「ハッケヨイ」の語源

キリシタン資料篇

第十一章 オ段長音の開合について—ロドリゲス『日本文

典』覚書—

第十二章 日葡辞書の和訳について

第十三章 日葡辞書のVgevoの語義—ficar deuendoの訳語

について—

第十四章 「アサガレイ（朝餉）」のことなど—日葡辞書の

ことば—

第十五章 日葡辞書の「サメ」「フカ」「ワニ」について

私が最初に出会った先生の論文は、第一章の「なり」の論文だった。この論文が初めに掲載されたのは平成元年三月の『國學院雜誌』で、この年の四月に私は國學院大學に入学した。大學の名前の付いた雑誌を図書館でたまたま目にして、巻頭論文

を読み、十分には理解できなかったものの、とても驚いた。高等学校の古典文法で「なり」に二種類あり、連体形に付くのは断定、終止形に付くのは推定伝聞と勉強していたが、その論文には、さらに推定伝聞の「なり」が形によって推定か伝聞かに分けられると書いてあったからだ。聞いたこともない話で、古典文法に未知の領域があることを知った。

この論文は、その後の研究史に照らして、二つの点で画期的だった。一つは、終止形接続の「なり」の意味として「聞音」という三つめを確立したことである。聞音とは音・声が聞こえてくる意を表し、次例がそれに当たる。

(1) 「丑四つ」と奏すなり。

〔枕草子〕

同趣旨の指摘は以前もあったが、確固とした地位と名称を与え、後続の研究に影響を与えたのはこの論文である。現在の研究状況から見ると、エヴィデンシャリティ（事態把握の情報源を問題にする文法範疇）に関する重要な業績と言える。

もう一つは、右に触れたことだが、「なり」の形式と意味の対応関係を指摘したことである。例えば、同じ連用形でも後続の助動詞によって「なりき」は伝聞、「なりつ」は聞音と対応し、「仏のおはすなる所」のような連体法の「なる」は伝聞を表す、など。連体法と伝聞の対応については後に追認もあり、終止形

と已然形に関して原まどか氏に論考『國學院大學国語研究会『国語研究』77、二〇一四年』があるが、「なり」の形式と意味の間に対応のあることはそれほど知られていない。残念である。論文集刊行を機に、広く知られることを願う。

さて、先生の研究の特徴の一つに、問題設定の斬新さと展開の意外さがあると思う。余人の思いもしない問題を立てられる。第二章の論文は、今昔物語集の「今夜」と「夜前」を比較し、類義語と目されていた二語が、実は別の時間帯を指す異義語であることを明らかにするのだが、考察の中で「今夜」は完了の助動詞ツに、「夜前」は過去の助動詞キに大きく偏って共起することを指摘している。副詞の語意の問題からテンスの問題へ展開している。また、「今夜」と「夜前」の比較の後、今度は「夜前」と「夜部」を比べ、二語が同じ時間帯を指す類義語であることを確認した上で、「夜前」は和製漢語で、主として男性が改まった場面で使用し、「夜部」は普通語で、日常的に使用することを指摘する。結局、ここでは一組の異義語と一組の類義語を扱い、語彙の研究に展開しているのである。

第三章から第五章までは敬語に関する論文で、先生の最初期のものを含む。「給ふる」と「侍り」の違いや、「申す」聞えさす「聞ゆ」の敬意差、受益尊敬の意味——「〜てくださる」と

いう意で、「お〜になる」という中立的な尊敬とは別——および専用形式「〜てたぶ」が中世以降に成立したことなど、主張された内容は現在では通説になっている。ところで、第四章の「申す」「聞えさす」「聞ゆ」のように使用頻度の高い語はやくもに比較しても、本質を見失うおそれがある。先生の採った方法は、次のような類似の句形を対象に、「と」の上の官位・身分などを比較するというものだった。

(2) a 宇多の帝と申す帝

b 山の井大納言と聞えさせけるなん、

c 源氏の兼明と聞ゆる、

〈以上、栄花物語〉

これは、適切に条件づけられた環境における比較で、対象をよく知らなければ考えつかない洗練された手法である。このような手法を、後続の我々は大いに学ぶべきである。

第六章の論文は今回読み直して、感嘆した。口幅たい申しようで恐縮だが、傑作だと思う。問いはこうである。次の傍線部は、①御導師が時刻に遅れて参上した（つまり、遅刻して来た）ことを言うのか、それとも②時刻に参上しなかった（つまり、その時にいなかった）ことを言うのか。

(3) 灌仏あて奉りて、御導師遅く参りければ、日暮れて御方々より童へ出し、布施など、おほやけざまに変らず、心々に

し給へり。

〈源氏物語〉

現代語の感覚からすれば前者だろうが（例えば「遅く起きた朝」は目が覚めている）、はたしてどうか。一見、些細に見えるかもしれないこの問題から出発して、いくつもの可能性を検討しながら、最終的には②の解釈が正しいことを証するのだが、その論証過程が豊富かつ明晰である。先行研究が「結果的表現」と称する語り方の問題、「遅く参りければ」の構造（意味の係り受け）、形容詞「遅し」の語義、「遅く+動詞」という句形に見られる共通性（すべて②を表す）、「遅れて+動詞」との相違（これが①の意味を表す）、漢語「遅参」との類義性、「遅く+動詞」の院政期以降の意味拡張（②の他に①も表すようになる）、これらを次々と取り上げながら、一つの結論に収斂していく。その展開は読んでいて胸が躍り、読後のため息が出た。これほど読ませる論文はなかなかない。

右の「遅参」や、先の「夜前」「夜部」、また語彙編第八章の「けそん」（「家損」ではなく「気損」が正しいと解く）の調査に、先生は古記録を資料として使用している。和文資料の語彙を研究する際に、変体漢文資料にまで目を配る研究は現在でも多くない。まして、東京大学史料編纂所のデータベースもなかった、三十年前の論文執筆当時には、皆無だったのではないかと

思う。徹底した文献調査と、用例の吟味は、先生の研究を特徴づけるものである。

その特徴は、キリシタン資料編に収められた諸論文にも如実に表れる。『日本文典』や『日葡辞書』、天草版『伊曾保物語』の記述を読解する際、先生は、普通には入手しにくいポルトガル語辞書や文法書を数多く駆使される。第十一章の論文でもそののだが、原論文は根拠とした資料の記述を邦訳文で載せ、原文は割愛していた。今回は紙尾康彦氏（開成学園）の手でポルトガル語原文が付され、参照の便を図っている。

最後の二章の論文は、『日葡辞書』所載の名詞を取り上げ、語釈のポルトガル語を厳密に読解し考証することによって、『邦訳日葡辞書』の訳文を訂正するものである。特に第十五章の論文では、日本語・ポルトガル語の語学的な資料ばかりでなく、動物百科の類も参照しながら、『日葡辞書』の「サメ」「フカ」「ワニ」の正体に迫っている。この論文は先生がものされたうちで最も執筆年が新しく、実はこれ以降にも口頭発表だけで活字にされていない「アサガヲ（朝顔）」「チドリ（千鳥）」に関する研究がある。いずれも狭い語学研究の枠に収まらず、「日葡辞書の博物誌」とでも呼べそうな領域へ先生の関心が向かったことが知られる。イタリアで「アサガヲ」の発表を聞いた、さる

高名な言語学者から「これこそ大学者の研究だと思った」とうかがったことがある。先生にはぜひ活字にして公刊して下さるようお願いしたい。

先生の論文は論旨明快でとても読みやすい。非常に高度で複雑なことも平明に書かれている。漫然と一読しただけでは、その問題の真の難しさに気づかないくらい、文章がわかりやすい。語彙編第十章の「ハッケヨイ」の語源を解く論文などはその最たるものだろう。問題が面白いこともあってか、この論文は日本語に関するアンソロジーに採られたり、某国立大学の二次試験の国語の問題に出題されたりしたことがある。

しかし、先生の研究は、もし自分が同じことをゼロから始めるとしたらと想像すると、恐ろしく手強い問題に高い障壁をいくつも越えて挑まなければならないと気づく。解き方、越え方があまりに鮮やかなので、読者はそこに思いが至らないのである。先生の論文をきちんと理解するには、読者の側に相応の学力が求められるので、若い研究者にとっては、すばらしい教材にもなるはずである。

最後に、吉田永弘氏（國學院大學）をはじめとする本論文集の実現に尽力された方々と、出版を快く引き受けられた（とうかがう）和泉書院に、先生の教え子の一人として、一日本語研

究者として深く感謝を表する。

（A5判、二六四頁、和泉書院、平成二八年五月、定価九一八〇円）